おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成30(2018)年
10月号
通巻578号
毎月23日発行
(題字　矢追日聖)

★発行日　平成30年10月23日
★発行所　大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷　大倭印刷株式会社
★定価　1部　250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替　01050-6-67002
大倭出版局
URL http://www.ohyamato.jp

「いのちの賑わい」(ろうけつ染め)　　ＢＯＯこと故横井英夫さんの作品（文・５頁）

昭和42(1967)年10月23日　月次祭法話より

みんなと仲良くするという簡単なことが一番難しい

法主　矢追日聖（満55歳）

場所と時代と年齢と役目

毎月の月次祭でございますが、今日は先程お参りしておる時に感じたことをお話しさせて頂きます。どなたも楽にして聞いとって下さい。

この須加のお宮の土地に移りましてから、今月の三十日でちょうど満二十年になります。振り返ってみればその歳月は実に短かく思えますが、いろいろな紆余曲折を経て今日の大倭が出来上がっておるんです。その中において最も気持ちに来るものは、「黎明大倭」という歌でございます。これは、大倭に縁がある、結び付きのある人たちが現在の日本の社会におきまして、どういうような成すべき役目があって大倭に集まって来るかという、いわゆる使命感の問題であるんです。

現在の宗教の実情は、どなたが見てもお分かりでしょうが、本質的なところから横にそれております。宗教はなきゃならないんだけれども、それが時代の変遷によって、いびつな流れ方をしておるように思うんです。

なぜ大倭が、本当の意味においての宗教、神の道という行き方をしなければならないか。そういうような行き方をすべき者が、なぜ現在、大倭のこの場所に出て来たかという、いわゆる時の問題なんですね。

私が今の時代に出ていなければ、必ず私に代わる誰かが同じ役目を持って出て来ておると思うんですが、長い長い歴史

の中から、矢追日聖という個人を生み出す場所と時代、それから年齢というもの。もし私が今八十歳ぐらいになっておれば、これから先こうした仕事は不可能だと思うんですけれども、おかげ様でまだここ十年二十年やるだけの自信は持っております。そのように生まれる場所と時代、年齢の全てが一体とならなければ、一つの使命的な仕事は出来ないんです。

日本の一番古い都

じゃ、なぜ私のような変わり者がこの大倭に出て来たかということは、これにはやっぱり古い歴史の流れがあるんです。

ここから二キロメートルほど向こうへまいりますと富雄川がございます。これは高山から源を発して鳥見の中央を通って、法隆寺のある斑鳩の里の方へ流れておる川でありまして、大和川へ合流しております。

我々がこの土地で長年、先祖から受け継いで聞き伝えている話しでは、この川の流域というのが日本の一番古い都であったと言われておるんです。いわゆる考古学では、遺跡とか遺物とかいうような科学的裏付けがなければ全く論じられないので、社会あるいは学者が認めた歴史ではありません。まぁ学問とすれば伝承学の中に入るんでしょう。

記録としては後のもんですけれども、物部氏の『旧事本記』とかには、饒速日命が鳥見の白庭に天下って都とされたというような言い伝えがございます。それがこの流域でございまして、鳥見というのは、『古事記』や『日本書紀』の編纂される少し前、ということは奈良朝のちょっと前頃から使われた名称だと思うんです。

古代においては、我々この土地におる者の言い伝えとしてナガソネノムラ（長曽根邑）とも言ったらしいんです。この鳥見の小川（富雄川）の谷筋を歩かれたら分かりますけれども、川の両側にそう高くない丘陵が続いておる。それはちょうど鋸歯状、鋸の歯のように、いろいろ高い所、峰がありまして、それをオネ（尾根）とかスソネ（裾根）と言うんです。裾根をヤマトではなまってソネと言う。

そういうように長い裾根が続いておるという谷筋の地形から、ナガソネという地名が残っておって、その土地一番の権力者、代表者がナガソネヒコという名前になっておるんですね。ヒコというのは日の皇子ということです。これは饒速日命の系統なんですが、代々皆ナガソネヒコ（長曽根日子）なんです。人間が何代替わっても、ずっと襲名したと思うんです。

ところが『日本書紀』では長髄彦という漢字を使っており、音では普通学校でナガス・ネヒコと教えております。そこへもってまたややこしい書き方しているんですね。例えば、ちょっと先に鳥見に天下った饒速日命と日向の方へ天下った瓊瓊杵尊とが兄弟のような書き方してます。そして瓊瓊杵尊から神武天皇まではかなり時代があるんですよ。そうであるのに、神武天皇がヤマトへ来られた時に、饒速日命と顔を合わすとか、時代感がなく随分おかしな話しなんです。これは昔の言い伝えを基礎に書いたもんですから科学的裏付けがなく、本当の歴史事実じゃないんです。

はっきりしないけれども、この土地には古い時代からヤマト民族がおりまして、それが鳥見を中心としたこの川筋を本拠として、地方にその威を振るっておった、というようなことは言えると思うんです。だからして饒速日命の系統の人達が代々この地方におられ、その系統が後に言う物部の一族なんですね。いわゆる神様のことを司っておった一門です。その先祖が長曽根日子（彦）なんです。それでこの土地はそういう意味からして日本の古代の祭り神事とか、今の言葉で言う宗教の根源の場所なんです。

古代の宗教を現在版に

じゃ、いつ頃という事実は私は分かりませんけれども、神武天皇よりずっと以前の話ですよ。現在の近鉄線で西大寺からずっと南の橿原の方へまいりますと、筒井とか平端という駅がございますが、大体その辺からこちらの北の方は、早くから陸であったようです。ところが平端から南の橿原の方は、その当時、全部湖で、畝傍山なんかは島のように浮いておったと思うんです。大和と河内の境界になっております亀ノ瀬の峠がありまして、今、大和川が一本出ているんですが、それが河内に抜けず、亀ノ瀬があそこまで深く切り込まなかった時代です。

それで、神代のような人達が住んでおったとすれば、山辺の方の山裾、あるいは柘植の方からずっと北に回って生駒山から春日の山との中間の鳥見地方と、山城の南だと思うんです。それで今の大和の平坦部、いわゆる広海のちょうど真ん中、鍵とか唐古とか田原本付近は湖の中心だったと思うんです。

あの付近から弥生式土器が沢山発掘されております。湖の水が河内に抜けてしまって、その平坦部に弥生時代の人達が住んだと仮定すれば、湖というのはよほど古い時代であったと思うんです。その時すでに鳥見のこの辺を中心として、饒速日命の系統のヤマト民族が住まいしておったという考え方も出て来るんです。

大倭神宮のあそこで、人が住んでおった時代から現代まで百七十二万年という言い伝えがあるんでございます。もう縄文時代とか弥生時代とかは物の数ではないんです。けれどもね、この数字には根拠がありませんので、本当か嘘か知りませんが話しとして聞いて、ただ「古いな」という感じさえ持ってもらえばいいんです。そういうようなところからずっと時代が下って、神武天皇が日向の方からヤマトの方へ移って来たという、そういう順序だと思うんです。

結論は、ここ鳥見の長曽根日子いわゆる長曽根の君の系統の者が物部の一門でありますから、これが日本の古代から伝わってきた神の道というような祭典行事を中心として伝えてきたと思うんです。

そういう土地柄に、私が明治の末期に生まれております。私が古代の人の代表者のような形において、その当時の人達の心を今の時代の人間に移して、新しく大倭の宗教として立っておるんです。だからしてこれはえらい己惚れた大袈裟な言い方ですけれども、とにかく私にはその古代の宗教を昭和の現在版に切り替えるというような役目があると自覚しておるんです。

本当の神さんとは

大倭の教義として、形のあるものと形のないものが一つである、いわゆる顕幽は一体であると、これはいつも申しております。我々が肉体を持っておれば、目に見えない心があります。心の働きによって肉体が行動しておるんです。それと同じで、我々人間だけが住まいしておる社会やなしに、肉体を持たない人間もおってそちらの方が数知れないほど沢山おるんだということをね、皆さん方に常に話してきたつもりなんです。

私の、この神さんとか仏さんとかに対しての感じ方・考え方というものは、皆さんが感じておるのとかなり開きがあると思う。というのは、現在の人間の能力以上の何か奇跡とか神秘的なこととか、あるいは霊威とか霊顕を感じるものに対しては、相手が狐であろうと狸であろうと蛇であろうと何であろうと、全てそれは神さんだというような考え方を持つことが多いんですね。ところがそんなもんは神さんじゃないんです。

日本の古代の人達が、本当の神様として合掌し、柏手を打って拝んだ対象というものは自然なんです。私達が生かされておる大きな力、大きな慈愛、自然というものが神さんであったわけなんです。

全国に神社がありますけれども、そこに祀られておる奉祭主神というものは、ほとんどが氏族神とか人格神で、いわば死んだ人間ですね。これも厳格に言えば神さんじゃないんです。神という言葉を使いますけれども、日本の古代の宗教から見れば、これは神さんじゃなくて我々の同胞なんです。我々は肉体を持っておる、相手は肉体を持っておらないだけで、お互いに人間だということで身近な感じ方を私はするんです。肉体の持たない人間、私はこれを霊界人とか霊人とかいう名前で呼んでおります。

だからして、祀られておる神さん以上に能力のある現界の人間もおれば、現界人よりも能力が上な霊界人もおるんです。それでお互いに相談し合うて日々生活していく。肉体の持つ人間の足りないところは、肉体の持たない人間の力を借りる。また霊界人が力足りない場合には、現界の人間が力を貸してやる。そういうような感じ方が、氏神と氏子の関係なんです。

だからその氏族神とか人格神はただ肉体がないだけですから、そのために我々が住まいしておるのと同じ形のお社を作るんです。古い神社の形式は天地根源の宮造りという千木の立っておるような、例えば代表的なものは出雲大社です。皆、その形が神さんを祀るお社だと思っておりますけれども、古代は、生きてる普通の人達があんな形の建物で住まいしておったんです。現在でも南方へ行くと沢山あると思うんです。

ところがそれ以前の本当の神さんに対しての信仰というものは、お社も何もいらないんですよ。例えば山とか川とか木とかね、特定の場所は定めますけれども、その中に宇宙の気というもの、宇宙の大霊というもの、我々人間を始めとして万物みんなを産み出し育ててくれる宇宙の力というもの、今の言葉で言えばエネルギーということになるんですが、それを感じる場所を一つのお祀りの場としたんですね。

だから一つの山をご本尊とするとか、一つの清浄な場所を区切るために磐境を作るとか、くるくると石を丸く並べるとか、あるいは宇宙の一つのエネルギー、宇宙の神さん、宇宙の気を迎えるために、大きな石でいわゆる磐座というものをこしらえたり、そこにまた一つのシンボルとして神籬というものを立てるんですね。今のテレビとかラジオ放送の電波は全国に行ってますけれども、それを受けるためにはアンテナを立てるでしょ。宇宙の気、宇宙の心、宇宙の本当の神様は、自然の中に遍満しておるんですから、電波と一緒で捉えどころがないんですけれども、この場所で拝むんやから、神籬を立てて、そこに神さん天下ってもらう、さがってもらうという気持ちなんですね。アンテナと同じ意味なんです。

そういう清浄な場所を決めて、そこで宇宙の心と人間の心を一つにする。そして自分自身の人間的浄化・向上を図っていく。それによって肉体の

持たない霊界におる人達との結び付きが親密にできる、話しもできる。まぁ友達のようにしていける。生きている人間にはいろいろ欲があって、いわゆる「まが罪」というものが沢山ございます。それを祓い清めて宇宙の心と一体になり、霊界人と心安く共に生活するがために、そういうような行事を常にやってきたわけなんです。これが古代の形なんですね。

霊界人を無視して戦争に

霊界における幾百万の肉体の持たない霊界人が、常に現界で生きておる私達の片方におって、いろいろな意味において結び付きがあるという根本的で大きな観念を、世界の現代人はおよそ忘れておると思うんです。例えれば右手なくして左手で仕事しているのと同じことで、人間の考え方だけで幸せに行きたいと思っておっても、結果としては絶対にそうは行かない。仮に親と子がお互い仲良う行こうとした場合でも、子供が親の言うことを全面的に無視すれば、親の感情に触れて対立して喧嘩が起こります。同じことで霊界人だって我々と一緒で感情も持っております。すぐ片一方におる霊界人と話し合いもし、手を結んで仲良うして行こうという心を、我々現界人の方が持たない場合には、霊界も狂うし現界も狂う。

それで結局どちらの被害が大きいかというと、生きている我々の方なんです。これは世界どこの国でも、例えばベトナムの戦争にしても、口の先で「平和、平和」となんぼ唱えても、現実は段々と争いが深くなってゆく。これは霊界人を無視した結果だと思うんです。

それで真に仲良く行きたければ、霊界のことは分からないにしても、現界だけでも先ず私達一人一人、自分の肉体と心が一致し一体とならなきゃいけないんです。分かりやすく言えば、夫婦とか親子とかあるいは家族とか社会においても、一人一人全部の人達が「お互いにみんな仲良う幸せで行こやないか」という線で一体とならなきゃいけない。ところが、どんな人とでも調和して仲良うしていける自分を作っていくということが一番難しいんです。

それには個人個人が修練しなきゃいけないと思うんです。その方法は、こうして一堂に集まるとか、全国にも世界中にも沢山宗教団体はございます。キリストの道、仏の道、あるいは神さんの道、どの宗教でも構わない、何でもよろしいんですよ。自分が向上していくように、そしてみんなと調和していくという一線を目的にして、一人一人が努める。そして大衆の中でそれに近い人間が出て来れば、少々社会で凶悪な人や調和を乱す人間がおっても、そういうような雰囲気で押していって浄化してゆけると思うんです。

けれどもまぁ人間はとかく自分の利欲のために他を無視するんですね。仏教でも言うように、いわゆる我とか自我というもの、あるいは欲というもの、先ず、それを段々となくするように努めなきゃいけない。そのために例えば仏教の教えでは死んだら地獄へ行くとか極楽へ行くとかいう。地獄・極楽というのがあってもなかってもよろしいんやけど、これも「みんな仲良うに行こうやないか」というための、一つの方法論なんですよ。

先ずは身近なところから

どちらにしても我々現界人は抓られたら痛いんだし、切れば血が出るんですから、やっぱりもう戦争はかなわん。例えば今目の前で戦争をやっておるベトナムでは一日に何人が死んでおるのか。またそんな戦争でなくとも日本では交通事故でも年に一万人から死んでゆきます。

こういうような現実を見た時にね、我々はそこで一つ切り替えなきゃいけない。自分も大事であれば他人も大事なんだという何でもないことなんです。車一つ乗るにしても、自分も安全に行きたいし、人にも迷惑をかけちゃいけない、傷さしちゃいけない殺しちゃいけない。考えてみれば幼稚園児でも分かる話しなんです。そういう簡単なことが、なぜ人間は出来ないのかと私は情けなく思いますね。

だから世界の宗教でも教育でも道徳でもよろしい、それによって「人間一人一人が自分の幸せを願うんだったら他人の幸せも願う。他人も幸せになれば自分も幸せになるんだ」というような目的に向かって、先ず身近なところから自分を叩き上げ訓練してゆく。わざわざ時間を費やして教会やお寺へ行ったりというような無理をしなくったって、自分の家庭の中において、また自分の職業を通して、その訓練は出来るはずなんです。そういうような心を持ってほしいがために、私は今こんなこと申し上げている。これは宗教の一番初歩なんです。

そして、もうかなり奥に進んだ人に対して言うことは、今言う霊界人と私達が常に同じ仲間であって、同じように生活しておるんだ、そして天地自然の親神様、大御親様に、霊界人も我々も共に手を合わせて帰依、崇敬しなきゃいけないんだというようなことなんです。

だから私は一応話しをするだけであって、皆さんに霊界人と自分がいつも一緒におるんだという気持ちになってくれとまでは言いません。言うたって恐らくなれないことなんですから、それより

も例えば我々日々見る新聞にあるような凶悪犯罪とか交通事故とか戦争とか、そういうような身近な問題を先ず我々の社会からなくするようにしなきゃならない。

それにまた、広島の原爆を中心とした平和運動を見ておると、政治色があり団体我というものが出来て、平和運動やっておる団体同士が争いを起こしている。それじゃつまらないんです。そういうややこしい捉われ、政治色や民族・国境、そんなもの全部なくした気持ちに皆さん方がなっていってもらうことを願います。

だから大倭の場合は、我々みんながそういうような人間になろうと努めるのが信仰だと思うんです。特定の神さんを拝んだり信仰するんじゃなしにね。私がどなたがおいでになっても、柏手打って合掌するのは、あなた達が持っておる心に対して敬意を表しているんです。人間として生まれ、親神さんから受け継いできた魂、宇宙の心という尊いものに通じる心を、みんなが持っておるんです。だから、お互いに尊敬し合い拝み合うというような心境において、人と人との交わりを進めてほしいと希望するんです。（文責・編集部）

表紙写真によせて
目に見えない世界とのつながりを思い出す

兵庫県明石市　水島照美

表紙を飾らせて頂いた作品の題名は「いのちの賑わい」。作者は横井英夫（1944-2011）。ろうけつ染め作品です。

横井英夫はBOO（ぶー）の愛称で、たくさんの方と出会う人生を送りました。BOOのそばにいると、何かが可笑しくて、思わず頬が緩んで笑ってしまう様々なことが高確率で起こります。その度に、場の空気が優しく柔らかくなりました。まぁ……時と場合によってピリリとしましたが。

この作品は2007年からの構想で、シリーズのように染めて愉しんでいたものです。山の景色は、若い頃に登山（岩登り、沢登り）した山々。雪渓を蝋筆でなぞっては大自然に向き合い、抱かれ、問いかけ、畏れ、心躍らせた多感な若者時代の思い出話をしてくれました。

2009年春、この作品で太平洋展に初挑戦し入選。「くなるまで3年連続入選を果たしました。

BOOは一体どこに住んでどんな暮らしをしているのだろうと思わせる浮遊感と不思議な安定感があり、子どものような翁のような人でした。おだやかでホワンホワンとやさしいけれど、若い頃には学生運動や労働運動に血気盛んで、ヘルメットをかぶってデモに参加していたそうです。かなりの書物を読破するインテリでもありました。

私が初めてBOOに出会ったのは1991年。ろうけつ染作家の石井静枝さんの家です。北鎌倉に住む白髪の可愛らしいおばあちゃんでした。金曜日の夜、いろいろな面白い老若男女が石井先生の家に集い、横笛の先生（BOO）も来ると友人に聞いたからでした。

関東大震災後の寄せ集めの廃材で建てたという石井先生の借家は、時代劇に出てくる長屋のようで、古き良き日本を感じさせる色々な匂いがしました。不揃い多色のタイルで仕上げられたお風呂や木の扉や木の鍵。怖いもの見たさで入ってびっくりの超日本式トイレや、いつの時代の電気機器？と戸惑うような家電製品。普通に歩いてもミシミシと音の鳴る床や揺れる窓ガラス。なぜか居心地が良く、多い時は4畳半の居間に20人ほどが丸いちゃぶ台を囲んで納豆1つ、豆腐1丁、ナス1本、ちくわ1本など持ち寄ったもので料理して食べる夕食は、おもしろくあたたかいものでした。

居間の鴨居には、深い藍色で染められた岩に腰掛けて横笛を吹く童子の作品が飾ってあり、思わず息を呑みました。「これすごいですね。先生の作品ですか」と聞くと、集まっている人たちが「みんなそう言うんだよねー、でもそれ横井さんの作品だよ」。『横井さん？』

すると石井先生が「横井さんは教えてもちっとも言うこと聞かないで勝手にやっちゃうのよー。それでびっくりする作品作るから天才よー」。

石井先生にはお弟子さんがたくさんいて、金曜夜に集う仲間たちも一応弟子にしてくれました。「昼間にざぁます婦人からお月謝いっぱいもらってるから、あんたたちはタダでいいわよ」。決して真面目で熱心な弟子たちではありませんでしたが、先生の個展前には「おやりなさいよー」と促されてみんなで筆を持ったものです。BOOもその環境でろうけつ染めを始めました。少しですが私も石井先生にろうけつ染めの手ほどきを受け、のちにろうけつ染めに本腰を入れるBOOに辛口のアドバイスができました。

横井さん（BOO）が先生の家に到着したので挨拶しようと近寄ると、「久しぶりだねぇ。名前なんだっけ。どこで会ったっけ」とBOO。「いえ今日初めてです。笛を教えてほしくて」と言いながら、実は私も「あれ誰だっけこの人。どこで会ったっけ？」という感覚がありました。これが出会いです。

ＢＯＯが大倭を知ったのは、アサヒグラフに掲載された法主さんの写真と聞いています。雷に打たれたように、会いたくてたまらず原付バイクで横浜から2日かけて大倭へ向かったそうです。最初に友達になった昇ちゃんに、手話とも言い難いジェスチャー合戦で法主さんに会いたいと話すと、拝殿にいる法主さんのところへ案内されました。

当時横浜の寿町に、ドヤ街のおっちゃんと子どもたちが対等に出会える場を作ろうと「たまり場ゆんたーく」を構えていたＢＯＯは、様々思うことはあるものの、一番聞きたかったのは付き合っている彼女のことで泣きながら話したそうです。が、そのことへのアドバイスはなかったそうです。

しばらくの時を経て、ＢＯＯは私を大倭に出会わせてくれました。禊会、神饌田の田植え、美味しいご飯、白ひげメガネのへび学者（＝井手泉さん）との出会い、たくさんの方々との出会い、弥勒ライブもさせて頂き、私にとって奈良と言えば大倭紫陽花邑です。

縁があり、私はＢＯＯと13年間一緒に暮らしました。いろいろなことがありました。

ＢＯＯは生きることを楽しむ達人で、思いつくと、好奇心と冒険心全開で前につんのめるように動き出し、気づくともういない感じでした。思いついたばかりの事を、まるで今成功しているかのように目をキラキラさせてホラ吹くこともあり、そのうち実現していることもありました。

そんなんでいいの？と腹立たしく思うこともありましたが、そんなんでいいんだなぁと今は思います。ＢＯＯに洗脳されたのかもしれませんが。

失敗は人並みはずれて多く、それでも、わらしべ長者のように何かをつかんで起き上がり、出会う人に話したり見せているうちに、思いがけない豊かな広がりを見せることがよくありました。

「好きなことをしているとき、人はとても美しいから好きなことをたくさんしなさい。心がワクワクすることを見つけてやりなさい」と言うのが持論で、私の指針になっているように思います。

さて、私の人生に大きな役割を持って現れたＢＯＯはおもちゃ箱を引っ繰り返すように、この世の様々なテーマを見せてくれました。でも、私にとってＢＯＯのそばにいたい（＝いなければ）と思った一番の理由は「目に見えない世界とのつながりを思い出す」というところだったと理解しています。それは彼の死後、水島誠と再婚して娘を授かり、再度夫を亡くす経験をした後しばらくして気づいたことでした。いくつもの過去世を旅している私の魂が、肉体を私に乗り換えた今生に、それらを思い出して傷を癒し、理解し進みたいと願って存在していることを感じています。

さて、ＢＯＯのエピソードは語っても語っても泉のごとく湧いてきます。あんな人、他に出会ったことがありません。そうだ！ＢＯＯのろうけつ染め作品を展示した「水島照美ライブ」好評です。

8月号「八尾と弓削が気になった」の補足

杉本　順一

（その1）法主様の遺された矢追家系図について

一代箭負の道麻呂（矢追）・二代正家・三代孝義・四代宗麻呂（姉、阿禮媛）・五代義賢（元明の世）

二代正家・妹今津姫（中大兄皇子ノ側室）

別行に

「（五代）義賢ハ舎人親王ニ仕ヘ日本書紀ノ勅撰ニハ大イニ力ヲ致シ、殆ンドソノ編集ハ義賢ガ之ヲ行ヘリ、阿禮ハ神通力ヲ有シ亦タ古史ニヨク通ジ、所謂仙人デアッタ、太安麻呂ハ阿禮ニ仕ヘテ居タ人デ小野安麻呂デアル」

八代宗將ノ子・宗祐・廣虫・清麻呂（和気）と道鏡については8月号の通り。

弓削一族では道鏡が有名。『おおやまと』平成22年5月号では、昔、法主様が発掘した陶棺に道鏡の姿が現れた時のこと、平成27年12月号では大倭大本宮の地にかつて存在した須加宮には孝謙天皇や道鏡も来られたことがあるという資料を載せています。是非、参照して下さい。

（その2）中村昇次さんについて

故中村昇次さんが元気に紫陽花邑で見事に自己主張しながら暮らしていた頃のこと、前の大倭会会長・中西正和さんと昇ちゃんについて話したことがあった。「昇ちゃんが亡くなったら、ドンナ世界に帰っていくんでしょうね。昇ちゃんがこれだけ自分に素直に生きていれば、私らよりいいトコにいかはるでしょうな」などと二人で昇ちゃんの死後を考えたりした。

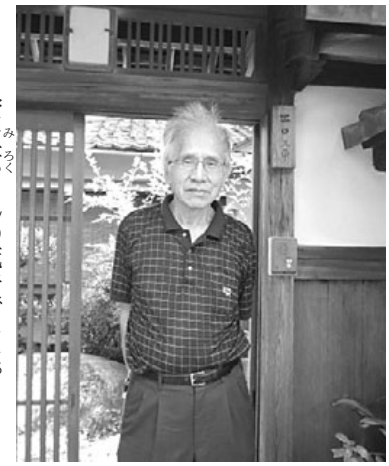
ふと独りになって昇ちゃんの前（さき）の世はドンナ人だったのかな……。瞬間「ドウキョウ」と感じた事があった。ふーん、そうか「ドウキョウ」なら道鏡しか思いつかない。手元の本で探した。歴史の知識が増えた。

中村昇次さんが帰幽された時、彼の法名「神（かむ）倭修道尚尓比古命（やまとしゅうどうしょうじひこのみこと）」に「修道」を使わせてもらったのには、こんなことがあったからである。これでいいですかと尋ねると、道鏡から結構ですとの感応があった。

寸莎

第133回

出口　三平さん



神様から離れたくなかった

今回の登場されるのは、平成23年に行われた「矢追日聖生誕百年記念」の際、講師として話された出口三平さんです。法主さんも生前、親しみをもって「仲間の出口さん」と呼んでおられた方です。

三平さんは戦後すぐの昭和21年10月12日に佐賀県小城町で、小柳平次郎、次子夫妻の4人兄弟の3番目の子として生まれました。生家は200年以上続く造り酒屋。蔵男たちや使用人、出入りの業者も多く、大家族の人間関係は大変だったようですが、季節感あふれる豊かな時間が流れていたようです。

そんな環境の中、優等生で明るくやんちゃな小学生でもあった三平さんに、はや6才にして大きな転機がやってきます。それは母方の祖父で誰よりも三平さんに目をかけていた久富三六（みろく）さんの死去でした。

久富家は、戦国時代の山陰の雄・尼子家の末裔で、鍋島藩の庇護をうけ海外にも陶磁器を輸出販売する有田町の名家でした。その当主であった三六さんは、大本教の出口王仁三郎聖師とは昵懇の間柄であり、その信者でもありました。そしてその祖父の他界の頃から、三平さんの心の奥に変化が生じたようです。1年余、夢遊病となったり、夢でみる虚無的なビジョンに苛（さいな）まれ、その心奥の傷が癒されることなく、京都大学文学部哲学科へ進んだのもその解決を求めてだったという。

しかし哲学に取り組んでもその悩みは続き、ついに「体液が止まって唾液も出ないカサカサ状態、神経だけ冴えている世界」に落ち込み、救いをモーツァルトのレクイエムを聞くことや、好きな歌人の短歌を紙片に書いては部屋に貼りまくって支えていたという。

時代は学園紛争の最盛期で、文学部は封鎖され居場所もなくなり、新聞販売店に住み込みながらも、とにかく光を求めよう……と腹を据えたころ、偶然に書店で大本の本に出会います。それは王仁三郎の孫である出口和明（やすあき）さんが、教団草創期のドキュメントを見事に描き出した『大地の母』（全12巻）で、衝撃的な出会いだったとか。

実家の両親にも送ると、祖父が信仰していた宗教世界だったことが判かり、「こんなのがあるばい」と母君から貰ったのが、「祝孫三平誕生」と題し、「小流潺々（せんせん）到大海　柳下鯉魚成飛龍　三六出現救世界　平和日本守宇宙」と孫に書いた姓名読み込みの祖父の書付けで、ここから三平さんの第二ラウンドが始まったようです。

とはいえ、すぐに大本へ……とは心を決められず、夕刊配達後に、京都東山の清水寺に通うこと百日、満願の日に初めて引いた御神籤（おみくじ）を開けると、「百番・大凶」、「いのち危うし」。頭が真っ白になり、帰り道の「占い」看板の家に飛び込むと、「神さまが守っている」「西の方へ行け」「結婚相手も決まっている」「苦労ばかりだが、大事な仕事がある」と、高齢な占い師の御託宣。「漫画のようですが、実話ですよ。あとでその占い師の家を探したが、見つからなかった……」と三平さん。

あれこれ傑作な話は端折りますが、結果、京都から西の亀岡、綾部に行き、出口和明さんの秘書となり、のちに義父になる同郷佐賀出身の出口栄二さんと出会い、次女の御遊（おゆう）さんと結ばれ出口姓に。大本教学研究の若手第一人者ともなり大活躍でしたが、信仰改革運動や新組織創設にも関わり、「苦労ばかり」の模索を続けます。

30年前のその頃から、「ご縁をいただいた紫陽花邑によく足を運び、法主さんに会うたびに、理屈抜きに安堵の思いで、ほんとにうれしかった。私の故里の一つです」と。

20年ほど前からは、一切の教団組織を離れてフリーに。綾部で仲間と農業をしたり、各地の友人とのネットワークを楽しみ、奥さんの理解もよろしく、王仁三郎も居たというお家では、大本や王仁三郎関連の資料整理にも追われ、綾部市の地域活動にも関与し、日々忙しいご様子。

三平さんの人生で一貫するものを訊くと、「わからないけど、ほんとうの神さまから離れたくないという思い……」と。幼児期からの辛い虚無感や、近代文明や組織につきまとう孤独感を脱し、神のいのちの世界に、「お蔭さまで、少しは触れはじめたかな」とのこと。（聞き手=林修三）

平成30年度大倭会文化講演会

（協賛：ＮＰＯ法人むすびの家・ＦＩＷＣ関西委員会）

平和への草の根・地下水の実践をたずねて
―ヒロシマでの活動から―

〈日　時〉平成30年11月17日(土)　午後2時～
〈場　所〉大倭拝殿　入場無料
〈講　師〉多賀俊介（たがしゅんすけ）氏

プロフィール:

◇1950年、広島県呉市生れ。広島市のノートルダム清心中高等学校に社会科教師として勤務。退職後、「廣島・ヒロシマ・広島をあるいて考える会」を立ち上げた。「ヒロシマと沖縄をむすぶつどい」世話人。「韓国の原爆被害者を救援する市民の会」世話人。「シュモーに学ぶ会」メンバー。

※昨年の大倭会文化行事の際、矢部顕さんの紹介で広島平和記念資料館のヒロシマピースボランティアとしてガイドをして頂き、今回の講師として推薦の声が上がりました。

※終戦直後、広島・長崎で被爆者の住宅建設のワークキャンプをしたアメリカ人のシュモー氏は、キリスト教フレンズ派のクエーカー教徒で、交流の家を建てたＦＩＷＣ関西委員会との間に、目に見えないつながりが感じられます。

講演会終了後、懇親会。会費1500円（夕食付）

あじさい日誌

9月15日　大倭神宮月次祭。
　午後、交流の家でＦＩＷＣ定例委員会。
9月22日　青森市の和久井宗一さんが、姪の西奈美早紀さん・その母きよさんと来邑。松本モト・杉本順一さんらが応接。大倭会館で1泊されました。
9月23日　大倭大本宮月次祭。
　祭典後、昭和41年9月23日の法話をお聞きしました。
9月26日　東大阪市の野幸重さんが帰幽されました（享年91歳）。ご主人の保夫さんと共に大倭のお祭りや行事にはいつも来られ皆、親しんでいた方です。
9月28日　午前中、鹿児島県鹿屋市の立石富生さんが来邑。教務本庁で岸野春子・杉本順一・松本モトさんらと歓談。鹿児島県のハンセン病療養所「星塚敬愛園」に暮らした島比呂志さんの主宰で1958年9月に誕生した『火山地帯』は、療養所の外に同人の多い文芸誌でしたが、島さん亡き後、主宰を引き継がれた方です。
　岸野・杉本さんの記憶から、島さんは紫陽花邑に住みたいという手紙を法主さんに出したことがあり、その返事を法主さんが、ＦＩＷＣの全国療養所訪問キャラバンで星塚敬愛園に行った杉本さんに託し、島さんは邑が山の中で医療機関も遠いと分かって自分から断念された、そういう昔話が出ました。
10月6日　大倭神宮月次祭。
　夜、大倭会館で邑倭の会。
10月7日　台風24号の動きもそれ、大倭町自治会のバス旅行で姫路城を訪ねました。
10月9日　西斎庭の柳に続き今度は鏡池の堤の柳の大木が、台風24号のあおりをうけて元に戻せなくなったため残念ながら伐採されました。
　屋久島の手塚賢至・田津子夫妻が来邑、交流の家に2泊。
大倭安宿苑では
10月8日　猛暑のため2ヵ月遅れの夏祭り。好天で須加宮寮前の新しい運動場で地域の皆さんとも交流でき無事終了。感謝！
（菅原園）
9月22日　美容師さん来園。カットはもちろん、おしゃべりも楽しみです。
（須加宮寮）
9月23日　物故者墓参、18名が大倭墓地へ行きました。
（長曽根寮）
9月17日（デイ）　敬老会。
10月8日（特養）　夏祭りの会場に行けなかった人も模擬店の食物を味わいました。
（茂毛路園）
10月8日　和太鼓に圧倒されたり、カラオケに出たり夏祭りの雰囲気を味わいました。
（八重垣園）
10月8日　車椅子の方も車で送迎、夏祭りに参加しました。

こだまことだま

あじさい邑　岸野　春子

　8月号に永仮まゆりさんが相模原障害者施設での殺傷事件のことを書いていた。ふと、自分が大倭紫陽花邑でやっていこうと決心して聾学校を退職、開設したばかりで超人手不足という菅原園の寮母にしてもらった頃のことを思い起こした。
　重度身体障害者療護施設は、回復の見込みがなく成人になった場合の受け皿ができたとして安堵感をもって受け止められていた。菅原園は日本で最初の4カ所の一つ、近畿では最初ということで見学者も多かった。
　法主さんは職員には、「どんな人にでもこの世に生まれた意味がある。障害は、この世での修行を果たすための、いわば神さんの芸術である。魂はそれを分かっている。こんなアホなどと思っていたら罰が当たる」と言われた。
　家族には、「ご先祖さんの因縁を引き受けて生まれてきているのだから、この子を大事にしたら家族が幸せになれるんです」と言われた。
　湯灌は「ゆりかごから墓場まで」という福祉のいわば仕上げ、皆案外やりたがったし、園でお通夜をする時に聞いた法主さんの霊界の話は特に印象が深い。
　私の場合、法主さんの話を信じ、人間を顕幽一体の存在として理解して、何とか立ち向かうことができたのだと思う。

あんない

＊月次祭（大倭神宮）
11月6日(火)　午後2時より大倭神宮にて。
＊月次祭（大倭神宮）
11月15日(木)　午後2時より大倭神宮にて。
＊大倭会主催第598回禊会
11月17日(土)　第3土曜日の変則となり、文化講演会として行われます。詳細は上欄に。
＊月次祭（大倭大本宮）
11月23日(祝)　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。